



	2024-32
監督・脚本: フリーヌル・パルマソン	
出演: エリオット・クロセット・ホーヴ / イングヴァール・E・シーグルソン / ヴィクトリア・カルメン・ゾンネ / ヤコブ・ローマン / ヒルマル・グズウソン	

## みどころ

日本人にとって中国は「近くて遠い国」だが、デンマークもアイスランドも「遠くて遠い国」だ。キリスト教が種子島銃と共に、南蛮の国ポルトガル・スペインから日本に伝播したのは織田信長の時代だが、ルーテル派の若き牧師ルーカスがデンマークからアイスランドへ旅立ったのは19世紀後半だ。

彼が敢えて“遠回りの陸路”で目的地に向かったのは、未知なる異国の風景や人々の姿を、愛用のコロジオン湿板写真カメラで撮影するため。今ならスマホ一つで済むものだが、本作前半では、そのロードムービーの過酷さに注目！

後半は目的地でのルーカスと村人たちとの心の交流のあり方にテーマが変化するが、そこで顕著なのが、ルーカスの性格の頑なさだ。言語の壁が厚いことは認めるが、もう少しニコニコしたら・・・。

そんな心配の中、村娘との恋が順調に育つこともなく、事態は最悪の方向へ！これは一体なぜ？キリスト教の布教って、また人間同士のコミュニケーションってこんなに難しいの？そんなテーマを本作でしっかり勉強したい。

## ■コロジオン湿板写真に注目！坂本龍馬もこれを？■

本作のチラシには、キリスト教ルーテル派の布教のため植民地のアイスランドに旅立った若きデンマーク人牧師ルーカス（エリオット・クロセット・ホーヴ）が、コロジオン湿板写真でカメラ撮影をしている風景が写っている。映画の発明はフランスのリュミエール兄弟が開発した1895年のシネマトグラフだと言われているが、世界初の実用的な写真の発明はタゲレオタイプだ。それに対して、本作のチラシに写っているコロジオン湿板写真はタゲレオタイプの次の形式だ。ちなみに、新しい物好きだった幕末の志士坂本龍馬が写っている有名な写真はタゲレオタイプの写真によるものだ。

本作の時代は19世紀の後半。ポルトガルやスペインからキリスト教が種子島銃と共に日本に伝えられたのは16世紀後半の戦国時代。織田信長、豊臣秀吉の庇護下で急速に広がったが、徳川幕府の体制が整うと突然キリシタン弾圧政策に切り替わったが、それは一体なぜ？

日本人の私には19世紀後半のデンマークとアイスランドの関係はよくわからないが、本作が作られたのは、アイスランドで発見された木箱の中に、ルーカスがコロジオン湿板式写真で撮影した7枚の写真が入っていたことにインスパイアされたためであることが冒頭の字幕で表示されるのでそれに注目！本作のそんな狙いは、本作が今ドキ珍しい1.33:1の「スタンダードサイズ（アカデミー比率）」で撮影されていることからよくわかる。もっとも、冒頭に提示されるそんなテロップも実は作り物らしいが・・・

## ■□■デンマークのアイスランド支配は？監督のルーツは？■□■

中国は日本にとって「近くて遠い国」。それに対して、デンマークはスウェーデン・ノルウェーと並ぶ「北欧3国」の一つだが、日本には「遠くて遠い国」だ。せいぜいハムレットの世界ぐらいいしか日本人は知らないだろう。ましてや、第2次世界大戦中の1944年に独立を果たすまで、デンマークに支配されていたというアイスランドのことなど、日本人は全く知らないはずだ。アイスランドは北海道と四国を合わせた面積くらいの小さな島国だが、そこには比類なき大自然が広がっているらしい。

本作は、現在は妻と3人の子供と一緒にアイスランドとデンマークに住んでいるというフリーヌル・パルマソン監督が、自らのルーツを探る上でどうしても作らなければならなかった作品らしい。日本は1945年の太平洋戦争（大東亜戦争？）終了後アメリカの占領下に置かれたが、幸いなことに、そこでは日本語を喋ることが許された。それに対して、デンマークによるアイスランド支配の実態はどうだったの？アイスランド人としてアイスランドで育ったフリーヌル・パルマソン監督はデンマークで長く住み、そこで子供を育てたため、彼の人生は2つの全く異なる国に分断されてきたらしい。そのため彼はどうしてもアイスランドとデンマークは歴史だけではなく言語や人々の間のコミュニケーションなどが正反対であることを探りたかったわけだ。

本作冒頭、ヴィンセント司教（ワーゲ・サンド）から、「現地の人々と環境に適応するように努めよ。さもないと、任務は失敗に終わる」と言い聞かされた若き牧師ルーカスは、キリスト教の布教のためにアイスランドに旅立つにあたり、自らの任務の厳しさに奮い立ったが・・・？

## ■□■なぜあえてこんな困難な陸路を？その挙句の果ては？■□■

牧師としてデンマークからアイスランドに赴くについて、ルーカスに与えられた任務は「冬が到来する前に赴任先の僻地の村に教会を建てること」だ。通訳者（ヒルマル・グズヨウンソン）と数人のアイスランド人労働者を伴って船に乗り込んだルーカスはあえて目的地から遠く離れたアイスランドの浜辺に上陸し、遠回りのルートを選んだが、それは一

体なぜ？それは、未知なる異国の風景やそこで出会った人々の姿をカメラで記録するためだが、それって、ちょっと冒険しすぎなのでは・・・？

そんな私の心配通り、本作前半では増水した川の急流に行く手を阻まれたり、馬がバランスを崩して十字架が下流に押し流されたり、旅の困難さがこれでもかこれでもかと思えるので、それに注目！その最大の被害は通訳者が溺れ死んでしまったことだが、目に見えないもっと大きい問題は、アイスランド語しか話せない不愛想な現地ガイドのラグナル（イングヴァール・E・シーグルズソン）が、支配者の側に立つルーカスに対して露骨に不信の目を向けていることだ。通訳者の死亡も、増水した川の急流を見て「一旦引き返すべきだ」というラグナルの忠告をルーカスが無視し渡河を強行したためだから、両者の対立はこの時点からほぼ頂点に達していたわけだ。

そんな中、ルーカス自身も疲労が極限に達し、不眠症にも苛まれ、その狂気の淵で歩きながらも「物事がうまく進まず、旅を続けられませんか・・・助けが必要です。教会建設は諦めて、故郷に帰りたいのです」と神に祈ることに。もっとも、ルーカスがこのまま死んでしまったら本作は成り立たないから、そこでルーカスが誰かに救われることは確実だが、さあ前半はロードムービー（？）だった本作の後半の展開は如何に？

## ■□■体調は回復！しかし、命の恩人たちとの交流は？■□■

朦朧として馬上から転落したルーカスは意識を失ったままラグナルらの担架で運ばれたが、目的地の村で目を覚ますことができたのは、心身共に衰弱した彼を手厚く看護してくれた2人の娘のおかげだった。聡明で美しい長女アンナ（ヴィクトリア・カルメン・ゾンネ）と、あどけなくも好奇心旺盛な妹のイーダ（イーダ・メッキン・フリンスドッティル）は、デンマークからの入植者である中年の農夫カール（ヤコブ・ローマン）の娘だから、教会建設の現場を視察できるまでに回復すれば、ルーカスと村人たちとの交流も進み、あわよくばルーカスとアンナとの結婚話も・・・？そんな期待が高まるのは当然だが、「現地の人々と環境に適応するように努めよ」とのヴィンセント司教の命令にもかかわらず、ラグナルと同じように、ルーカスも不愛想で頑なな姿勢（性格？）を一向に変えていないから、アレレ、アレレ・・・？

なぜ、もっとニコニコできないの？なぜ、もっと積極的に村人との交流を進められないの？それができない第1の原因はルーカスの性格だが、第2の原因は言語の問題だ。つまりルーカスはアイスランド語を話せず、逆に二人の娘はデンマーク語を話せるものの、その父親たるカールはデンマーク語を話せないためだ。そのため、地元カップルの結婚式の祝宴でアンナとのダンスに興じたルーカスはいつものまにか喜びを感じていたが、村の伝統であるレスリングの試合ではラグナルを相手に激しいとくみ合いを繰り広げることに。教会の建築は冬が来る前に完成する見込みがついたが、肝心のルーカスと村人たちとの心の交流はこれでは到底ムリ！そんな不安の中で迎える本作の終盤は・・・？

## ■□■どこでどんな衝突が？その原因は？その対処、結末は？■□■

本作の邦題は『ゴッドランド』だが、英題は『GODLAND』。これはアイスランド語では『Volaða Land』。デンマーク語では『Vanskabte Land』だが、なぜ、これがスクリーン上で再三提示されるの？

本作のパンフレットには、高橋ヨシキ（アートディレクター、映画評論家）氏の『「外部」への到達不可能性と、脳内の「像（イメージ）」～『ゴッドランド』で拮抗するカオスとカテゴリー～』と題するエッセイがある。そこでは、『ゴッドランド』は具象と抽象にまつわる物語で、焦点となるのは「外的な現実」と「内的な現実（の像）」の拮抗である」と述べた上、上記3つのタイトルについて詳細な解説がなされているので、これは必読だ。

ルーカスと村人たちとの心の交流がテーマになる本作後半のハイライトの1つは、ルーカスとラグナルとの対立が極限にまで達するシークエンスだ。その発端は、「最後に写真を一枚撮ってくれ」というラグナルの頼みをルーカスが「銀板がなくなった」という理由で断ったためだが、たったそんなことで、そんなどうしようもない事態になってしまうの？ルーカスとラグナルとの真の衝突は一体何だったの？もう1つのハイライトは完成した教会ではじめてミサを行うルーカスの姿だ。神に祈り教会に精霊を呼び寄せようとするものの、外で犬が泣きだして、教会内で赤ん坊が泣きわめくと、ルーカスは・・・？

本作後半のあっと驚くこの2つのハイライトは、あなた自身の目でしっかりと！それを考える上で参考になるのはパンフレットにあるフリーヌル・パルマソン監督の「ステートメント」だから、これも必読。さあ、あなたはこの「ステートメント」をどう読み解き、本作の結末をどう考える？

## ■□■フリーヌル・パルマソン監督のステートメントに注目！■□■

パンフレットでは本作を「異文化の衝突、自然と文化の対立、支配や信仰といった深遠なテーマを探索し、驚くべき神秘性を湛えながら、魂の彷徨を荘厳かつスリリングに描く人間ドラマ」と紹介しているが、これを読むだけで本作がいかにクソ難しい映画が容易に想像がつくはずだ。しかして、それを読み解くヒントは次のフリーヌル・パルマソン監督の「ステートメント」にあるので、これも必読！

### 監督のステートメント

『ゴッドランド』は軍隊の神、神話の受容、あるいはある種のマジックリアリズムを探索しています。また野心、愛、信仰、神への恐れ、そして自分の弱さを探し、なにかの一部になることなどの側面についての映画でもあります。

そしてコミュニケーションという対外的な側面、そして私たちのコミュニケーションのあり方、いかにコミュニケーションの間違いについても描いています。内面と外面の葛藤についてです。人間と自然、そして動物がどのように互いに衝突するかについてです。

結局のところ、この映画を通して、私たちが分かち合えるもの、結びつけるものについて、とても良くわかりました。最後には、死こそが私たちが結びつける唯一のものなのかもしれないと知って驚きました。これがこの映画の核心であり、感動の源です。

さあ、あなたはこのステートメントをどう読み解き、本作の結末をどう考える？

2024（令和6）年4月23日記